

つとも侍らぬこそ、つきせぬ心ちし侍れなどぞありける、

〔謠曲〕忠度

抑此須磨の浦と申は、さびしきゆへに其名をうる、わくらはに問人あらばすまの浦に、もしほたれつ、わぶとこたへよ、實や漁のあま小船、もしほの煙松の風、いづれかさびしからすと云事なき、

敏馬浦

〔萬葉集六〕過敏馬浦時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌、

御食向淡路乃島二直向三犬女乃浦能與部庭深松採浦回庭名告藻荇深見流乃見卷欲跡莫告藻之己名惜三間使裳不遣而吾者生友奈重二、歌略

〔萬葉集抄五〕攝津國風土記曰、美奴賣松原、今稱美奴賣者、神名、其神本居能勢郡美奴賣山、昔息長足

比賣天皇、幸于筑紫國時、集諸神祇於川邊郡內神前松原、以求禮福、于時此神亦同來、集曰、吾亦護治仍諭之曰、吾所住乃山、有須義之木、各宜材採、爲吾造船、則乘此船而可行幸、當有幸福、天皇乃隨神教、

遣命造船此神船、遂征新羅、略還來之時、祠祭此神於斯浦、並留船以獻神、亦號此地曰美奴賣、敏馬浦、此處歟、

浦、此處歟、

伊勢國  
安漕浦

〔書言字考節用集二〕乾二坤安濃浦、又作阿漕勢州安濃郡、

〔伊勢參宮名所圖會三〕阿古木浦、今津の城下岩田橋より巽にありといへど、古所詳ならず、略中

按るに、阿漕は地名にて、元は一堆の島にてありしなるべし、其證歌六帖鯛の題にて、

あふことをあこぎの島にひく鯛のたび重ならば人まりぬべし、此歌を直して、いせの海あこぎが浦にひくあみのたびかさなれば顯れにけり、とさへ誤れり、あこぎといふ名の事、或云濃の字をコギと讀て、安濃浦を誤りたるか、又云、あことは海子の事にて、きとは木なるべし、これは鹽木をこ、に積たる事の多きによりて、あこぎとはいひたるにや、あこの證歌は、萬葉三